

# 「海外フィールド演習」による海外経験と国際理解

－ 韓国・江原での3度のプログラムによる成果と課題－

永松 大\*・馬場 芳\*\*

First experience with outside Japan and international thinking by the “Overseas Fieldwork Program”

Performances and subjects on Kwangwon Programs 2010-2013, Korea

NAGAMATSU Dai\*,BAMBA Kaori\*\*

キーワード：海外短期派遣，江原大学校，グローバル人材育成推進事業，国際交流，DMZ 訪問

Key Words: , Overseas short-term dispatch, Kangwon National University, Project for Promotion of Global Human Resource Development, International exchange, DMZ tour

## 1. はじめに

グローバル人材の育成は日本の最優先課題の一つであり，各大学・大学院では海外短期派遣プログラムの充実や，必修化などの動きが活発化している（岡田 2012，佐藤 2014 など）。鳥取大学地域学部でも，地域学部国際交流活性化プロジェクトを発端として専門科目「海外フィールド演習」が構想された（永松ほか 2010）。これは学部学生・教員の国際交流推進，地域を見つめる目の複眼化と「地球地域学」の醸成，北東アジア研究の推進を目指したものである（筒井ほか 2013）。教育・研究の国際化は，鳥取大学の教育研究目標にも合致し（田川・永松 2010），鳥取大学が 2012 年度に文部科学省「グローバル人材育成推進事業」に採択されたことで一層の推進が図られている。この流れの中で，「海外フィールド演習」は，地域学部学生向け海外短期派遣プログラムの中心に位置づけられ（筒井ほか 2013），3 年間の試行を経て 2013（平成 25）年度から正式に学部カリキュラムに組み込まれた。北米，中国，ベトナム，インドネシアなどでプログラムが始まっており，これまでのパイロットプログラムについて，筒井ほか（2012，2013）がベトナムプログラム，仲野ほか（2013）がインドネシアプログラムについて，それぞれ成果と課題の報告をしている。

韓国・江原プログラムは，海外フィールド演習初のパイロットプログラムとして 2010 年夏に初めて実施された。江原プログラムは，江原大学校経営大学（学部）の李悠 Yi, Yu 教授による受け入れで行われ，その発端と実施の経緯は田川・永松（2010）に記した。その後も続けて 2012 年夏，2014 年春（2013 年度）に実施された。本稿では，2010 年度に実施した初回プログラム（田川・永松 2010）に続く，2012 年度（パイロット実施）と 2013 年度（正式カリキュラム）の 2 度のプログラムを振り返り，その概要と成果を報告するとともに，課題について考察する。プログラム参加学生の演習前から演習中のようす，帰国後の感想レポートをもとに，海外フィールド演習が想定する地域学部生の海外経験や国際理解の向上効果について検証をおこなった。

---

\*鳥取大学地域学部地域環境学科

\*\*鳥取大学地域学部地域政策学科

## II. 江原道の概要と江原大学校とのこれまでの交流

大韓民国江原道 (Gangwon-do) は朝鮮半島の中央東側に位置し、面積の大部分を山地が占める。江原道は、南北 240km、東西 150km に広がり総面積は 20,000km<sup>2</sup> を越えるが、南北の休戦ラインで分断されており、韓国側の面積は約 17,000km<sup>2</sup> である。これは鳥取県と岡山県、兵庫県をあわせた面積 (約 19,000km<sup>2</sup>) に近い。東は日本海に面し、西側にはソウル首都圏が隣接する。漢江、洛東江の源流部にあたり、特にソウル首都圏の水源地帯として重要である。面積の 82% を林野が占め低地が少ないため、総人口は約 155 万人にとどまる (Gangwon Province 2014)。江原道は、道庁のある春川市 (Chuncheon-si, 約 27 万人) の他に南西部の原州市 (Wonju-si, 約 33 万人)、日本海側の江陵市 (Gangneung-si, 約 22 万人) など 7 市と 11 の郡からなる。自然環境を生かしてスキーリゾートの開発が進んでおり、平昌郡を主会場として 2018 年冬のオリンピック開催が決定している。

鳥取県は環日本海交流の一環として韓国、中国、ロシア、モンゴルの自治体と友好提携を結んでおり、中でも江原道と活発な交流を行ってきた。1994 年に江原道と友好提携を結んで以来、主に青少年、文化芸術、環境、農業、経済等の分野で交流が進められている。境港市と江原道東海市 (Donghae-si, 約 9 万人)、ロシアのウラジオストク間を直接結ぶ環日本海定期貨客船が 2009 年に就航し、鳥取県と江原道の間にはささやかながら経済的な結びつきも生まれつつある。

春川市は、江原道の北西部に位置する道行政の中心都市である。ソウルから東に約 90km、漢江 (Han-gan) の上流部にあたり、雪岳山から流れる昭陽江 (Soyang-gan) と、北朝鮮に発する北漢江 (Bukhan-gan) が合流する春川盆地に市街地が広がっている。昭陽ダム、春川ダム、衣岩ダムなどの人工湖が市街地を取り囲み、水と緑の街として観光を推進している。2009 年に高速道路、2012 年には準高速鉄道 ITX-青春が開通してソウルと 70 分ほどで結ばれるようになり、春川への交通アクセスは飛躍的に改善された。韓流ブームの先駆け「冬のソナタ」のロケ地としても有名である。

江原大学校 (Kangwon National University) は、1947 年に春川市立農業大学として創立、1970 年に江原大学校となった。現在は、人文社会科学、自然科学、工学、芸術スポーツ、医学、および異分野融合分野の 6 領域から構成される総合大学で、学生総数は 2 万人を超える。

鳥取大学と江原大学校との学術交流協定は、工学部を中心として 1996 年から始まった。両大学教員の研究交流をはじめ、2003 年より毎年交互訪問が続いている工学部の日韓学生交流環境セミナー、短期語学研修プログラム、単位互換制度による交換留学制度等による学生交流が行われてきた。地域学部では、2007 年から開催されている北東アジア大学教授協議会を通じて江原大学校との交流が広がってきた。地域学部には、江原大学校から日本の文化や語学を学びに特別聴講学生として短期留学する学生が多く、2009 (平成 21) - 2013 (平成 25) 年の 5 年間に 24 名を受け入れている (地域学部教務係資料より)。一方で、鳥取大学から江原大学校へ留学した地域学部学生はほとんどおらず、今後の派遣活発化が期待されている。

## III. 韓国・江原プログラムの進行

### 1. 事前準備と実習プログラムの検討

表 1 に 2012 年度と 2013 年度の「海外フィールド演習」の進行スケジュールを示した。韓国・江原プログラムは、現在のところ個人間のやりとりによって組み立てられているため、開催の事前準備は、受け入れ側とのやりとりを通じた訪問日程の打ち合わせから始まる。韓国・江原プログラムは 2010 年度は 8/22 出発、2012 年度は 9/2 出発、2013 年度は 3/2 出発と日程が固定できておらず、毎回、まず日程を決めてから内容を確定する段取りとなっている。日程の固定は、課題である。

表1 2012年度、2013年度の韓国・江原プログラム日程進行

2012(平成24)年度プログラム	
日付	内容
2012/7/5	参加学生の募集開始(7/20締め切り)
7/19	プログラムの説明会実施
7/25	参加学生6名の確定, 航空券手配(アジアナ航空米子支店)
7/27	参加学生への事前指導(7/31までに航空券代振り込み)
8/8	海外渡航前危機管理セミナー(国際交流センター 竹田先生)
8/29	参加学生への直前指導
9/2	出発(プログラム開始, 8日間)
9/9	帰国
9/30	感想レポート提出
2013(平成25)年度プログラム	
日付	内容
2013/12/2	参加学生の募集開始(12/16締め切り)
12/16	参加希望1名のみ, 都合で説明会実施できず, 勧誘継続
12/27	参加希望3名まで増加, 引き続き勧誘継続
2014/1/14	JASSO奨学金申請締め切り, 参加希望5名に増加
1/21	参加者確定, 航空券手配(アジアナ航空HP, 代理店手数料回避)
1/24	参加学生への説明会実施(1/31までに航空券代振り込み)
2/19	危機管理セミナー(田川先生), 事前指導(文化 柳 静我先生)
2/27	参加学生への直前指導
3/2	出発(プログラム開始, 10日間)
3/11	帰国
3/20	感想レポート締め切り
4月	教務部会にて単位認定

引率者の決定と大まかな実習内容の打ち合わせは、日程調整と同時並行、あるいは短い時間差で行った。2012年度は7月に入ってようやく日程と引率者を確定し、学生参加者の募集となった。これはプログラムの開催が急遽決まった2010年度と同様に募集から出発まで2ヶ月弱という慌ただしさであった。2013年度のプログラムは引率者の都合で春開催となり、受け入れの李悠 Yi, Yu 先生との打ち合わせには時間的余裕があったものの、JASSO 奨学金申請の締め切りに促されてようやく準備がすすみ、なんとか出発3ヶ月前の参加者募集となった。年末年始を挟むこととなり、それでも準備日程には余裕がなかった。

初回2010年度と2012年度のパイロットプログラムは8日間の日程であったが、2013年度は中身の充実とJASSO奨学金申請資格を満たす目的のため、日程を10日間に延長した。2010年度の初回以来、韓国・江原プログラムは、施設見学、文化・交流体験、野外実習を柱に組み立ててきた。2012年度のプログラムは初回プログラムとほぼ同様に組み立て、2013年度プログラムには日程の余裕を生かして江原道外の見学を増やすなどの変更を加えたが、上記の考え方は一貫している。2013年度は年度末の2014年3月開催となったため、寒冷地である江原道では野外実習を少なくするなどの工夫を行った。

## 2. 参加者の募集

2012年度のプログラムは、募集時期こそ遅くなったが個別の問い合わせと説明会により地域文化学科から4名、地域環境学科から2名の応募があり、参加者は順調に決定した。しかし2013年度プログラムの募集では、問い合わせすらほとんどなく、なかなか参加者が集まらなかった。これには、

引率教員の準備不足で説明会が開催できなかったなど広報の問題もあるが、同時期（3月）の出発でベトナム、中国、韓国南ソウル、インドネシアのプログラムが計画されていたこと、日韓関係が悪化しており、韓国訪問について学生の関心が低かったことなどの影響も考えられる。中でも本プログラムの2週間後に出発となった韓国・南ソウルプログラムとは明確に競合がみられ、学生からは江原プログラムとの違いを問い合わせる質問があった。地域文化学科 柳 静我先生が南ソウルプログラムを引率されたこともあり、2012年度の江原プログラムに4名参加した地域文化学科の学生は今回、江原プログラムには参加しなかった。2013年度の江原プログラムには結局、地域環境学科の5名が参加を決めた。このうち4名は、筆者の研究室配属と調査実習配属の学生となった。

本プログラムでは海外渡航が初めての学生が多いこともあり、海外渡航前危機管理セミナーを特に重要視した。2012年度、2013年度とも別プログラムの日程にあわせた危機管理セミナー参加の機会もあったが、結局本プログラム単独でセミナーをお願いして実施した。2013年度は危機管理セミナーに加えて、前述の柳 静我先生に韓国事情と韓国語入門講座を実施していただき、参加者の事前学習が大いに進んだ。

表2 2012年度、2013年度の韓国・江原プログラム概要

2012年度プログラム 引率:永松 大・馬場 芳		2013年度プログラム 引率:永松 大・馬場 芳	
日付	内容	日付	内容
1 9/2 (日)	10:45 鳥取駅集合(11:00 米子空港行きバス) 15:00 OZ163 米子-仁川16:30着 入国、両替、江原道加平(Gapyeong)に移動(高速バス) 江原大Yi, Yi教授、学生2名と合流、南怡島(*1)へ移動 宿泊:Nami Island Hotel(コンドミニアム、自炊)	1 3/2 (日)	10:45 鳥取駅集合(11:00 米子空港行きバス) 14:30 OZ163 米子-仁川16:00着 空港から水安堡(Suanbo)に移動(大学バス)(*9) スワンポにて夕食、キジ料理 宿泊:朝鮮観光ホテル(スワンポ温泉)
	午前:南怡島内見学		午前:月岳山(Woraksan)国立公園見学(*9)
2 9/3 (月)	午後:韓国国立樹木園(*2)見学(大学バス) 夕方:Welcomeパーティ(春川市内) 宿泊:春川市江原森林体験場(コテージ)	2 3/3 (月)	慶州に移動(大学バス) 午後:歴史研修(*9)ソックラム、慶州歴史遺産地区 宿泊:ホテル(慶州)
	楊口(Yanggu)郡DMZ一日ツアー(*3)(大学バス)		午前:企業見学(RINNO)(*4)、(蔚山)
3 9/4 (火)	午前:頭陀淵(Dutayeon)トレッキングコース 午後:戦争記念館、乙支(Eulji)展望台、第4トンネル見学 宿泊:春川市江原森林体験場(コテージ、自炊)	3 3/4 (火)	午後:民俗研修(安東河回村)(*9) 春川に移動(大学バス) 宿泊:江原大演習林(自炊、江原大学生2名応援)
	午前:IT企業見学(DuZon)(*4)、インタビュー		午前:江原大演習林(*5)フィールドワーク
4 9/5 (水)	午後:江原大演習林(*5)見学 夕方:サムルノリ体験(江原大) 宿泊:春川市江原森林体験場(コテージ)	4 3/5 (水)	(山林大学Park研究室協力) 午後:江原大に移動、総長ほか表敬訪問、春川市内見学 宿泊:江原大学生宅ホームステイ(教員はホテル泊)
	午前:プレゼンテーション準備(宿舎)		楊口(Yanggu)郡DMZ一日ツアー(*3)(大学バス)
5 9/6 (木)	昼食:春川マックス体験博物館(マックス作り体験) 午後:江原道庁訪問(*6)、インタビュー、プレゼン準備 宿泊:春川市江原道自然休養林コテージ	5 3/6 (木)	午前:頭陀淵(Dutayeon)トレッキングコース 午後:戦争記念館、乙支(Eulji)展望台、第4トンネル見学 宿泊:江原大学生宅ホームステイ(教員はホテル泊)
	午前:江原大キャンパスツアー、プレゼン準備		午前:江原大大学院授業に参加、プレゼンテーション準備
6 9/7 (金)	午後:プレゼンテーション&日韓学生懇談会(*7) Farewellパーティ 宿泊:Piano Motel(春川市)	6 3/7 (金)	昼食:春川マックス体験博物館(マックス作り体験) 午後:江原大にてプレゼンテーション準備 宿泊:江原大学生宅ホームステイ(教員はホテル泊)
	午前:ソウルへ移動(ITX南春川-龍山)		午前:プレゼンテーション準備(江原大)、夕食にて昼食
7 9/8 (土)	ソウル研修(*8)(国立民俗博物館など) 宿泊:Victoria Hotel(ソウル)	7 3/8 (土)	午後:プレゼンテーション&討論会(*7)、打ち上げ 宿泊:江原大学生宅ホームステイ(教員はホテル泊)
	9:00 仁川空港に移動(地下鉄)		早朝:ホームステイ先の学生とお別れ
8 9/9 (日)	12:30 OZ164 米子着 14:00 鳥取駅行きバス 16:30着	8 3/9 (日)	午前:ソウルに移動(大学公用車)、ソウル研修(*8) (国立中央博物館、戦争記念館、国立民族博物館など) 宿泊:Aventree Hotel Jongno(ソウル)
			午後まで:ソウル市内自由行動(明洞など)
*かっこ書きの数字は、本文「IV.プログラムの構成」内の項に対応		9 3/10 (月)	午後:弘大江原大ソウルオフィス訪問、Farewellパーティ 宿泊:Aventree Hotel Jongno(ソウル)
			3/11 午前:仁川空港に移動(リムジンバス)
		10 3/11 (火)	12:30 OZ164-14:00 米子(リムジンバスで鳥取駅)、解散

#### IV. プログラムの構成

表2に2012年度と2013年度プログラムの日程表を示した。2012年度プログラムでは、参加者全員が合宿形式で宿泊し、そこに生活面全般のサポート役として江原大学の学生に加わってもらった。1日目の高速バス下車（加平）から7日目朝に春川を離れるまで、江原大学の同一の男子学生2名にずっとお世話になった。2人は鳥取大学に短期留学した経験のある学生で、日本語と日本の学生に慣れており、生活面から交流面まで非常に頼もしいご協力をいただいた。

2013年度プログラムでも、3日目夕方の江原大演習林から8日目朝に春川を離れるまで江原大学の学生にサポートをお願いした。ただし2012年度とは異なり、演習林の案内、ホームスティのホスト、学内と市内の案内、ショッピング等、10人を超える韓国人学生に交替で担当してもらった。当日になってもサポート学生が決まらずに予定が変更となったり、日本語の話せない学生とのコミュニケーションが上手くいかなかったりということはあったが、みな初めて会う日本人学生に親切に対応してくれて、充実した中身のある交流となった。

2013年度のプログラムでは日程が8日間から10日間となって、韓国の文化や歴史に触れる旅を追加した。初めて訪れる韓国の歴史や文化を学ぶため、最初の3日間は韓国内を移動し慶州や安東などの観光地を訪れた。4日目からは春川を拠点に、江原大の演習林調査、現地学生との交流、南北休戦ラインの訪問、英語プレゼンテーションなど、2012年度プログラムと同様の組み立てとした。フィールド演習のコンセプトは変更していないが、2013年度プログラムの改善点は、江原道外の見学を行うことと、春川での学生宅ホームスティの試みを含む、学生交流の深化であった。

以下、プログラムを構成する主要な項目について紹介する。2012年度あるいは2013年度のみ実施した項目には、実施年を追記した。

##### 1. 南怡村(2012年)

2012年度の海外フィールド演習・江原プログラムは、まず江原道有数の観光地・南怡村(Namiseom)からスタートした。南怡村は、清平ダムとあわせて造られた、北漢江に浮かぶ半月型の周囲6kmの人工島で、「冬のソナタ」のフィルム効果により、観光客の誘致に成功した韓国有数の観光地である。李氏朝鮮王朝時代の将軍・南怡の墓が島内にあることに因んで名づけられた。所有者は、株式会社南怡村で、代表取締役の絵本作家・康禹鉉は2006年に「ナミナラ共和国」としてミニ独立国を宣言した。「遊びをクリエイイトする」というコンセプトのもと、国内の芸術家の作品を島内のあらゆる所に配置、子供用のゲームや遊園地、放たれた動物達や伝統的な展示館など、ボートで島に渡るという演出とあわせて来訪者がさまざまに楽しめる空間となっている。



図1 南怡村でのバーベキュー



図2 南怡村の見学

初日の夕刻にこの島に到着し、韓国の学生たちと自炊をすることから交流が始まった。学生たちは、自己紹介、手土産の交換を端緒に、食事（韓国式バーベキュー）の準備をしながら、互いの文化や韓国で調査したいことなどを話題に、徐々にコミュニケーションがとれるようになった。韓国料理を楽しみながら、韓国の学生達とうちとけていった（図1）。南怡村での滞在は、韓国の歴史遺跡と芸術や文化、そのクリエイティブの仕方、そこに撮影地としての誘客効果を結びつける戦略について知る機会となった（図2）。

## 2. 国立樹木園 (2012 年)

2012 年のプログラムでは、森林に関するフィールド演習として韓国国立樹木園を訪れた。国立樹木園は江原道にほど近い京畿道南楊州市に位置し、1,157ha の規模がある。光陵（Gwangneung）樹木園とも呼ばれ、朝鮮王朝 7 代、世祖（Sejo）の王陵の地として 500 年の間、厳重に管理されてきた場所である（光陵は朝鮮王陵全体として世界文化遺産登録）。園内は自然林と人工林からなっていて、ユネスコの生物圏保全地域にも指定されている。整った山林博物館も併設されているが、本プログラムでは博物館見学でなく、韓国林業研究院研究員の方に、実際に野外を歩いてガイドをいただいた（図3）。成熟したチョウセンゴヨウ人工林の美林、広葉樹二次林とナラの成熟林を案内いただき、韓国中部における丘陵地の典型的な植生がよく理解できた。希少な森林植物の保全例についても話題がおよび、鳥取県でも保全が問題になっている野生ラン、クマガイソウ *Cypripedium japonicum* の保護地も見学させてもらった。筆者にはたいへん興味深い訪問であったが、森林に特別な興味を持っていない学生にターゲットを絞って何を学ばせるか、少し工夫が必要と思われた。



図3 国立樹木園の見学



図4 頭陀淵（Dutayeon）の地雷注意鉄線

## 3. DMZ

2012, 2013 両年のプログラムともほぼ同様の行程で、北朝鮮に接する楊口（Yanggu）郡を訪問する一日ツアーを実施した。早朝、バスで春川を出発し、午前、DMZ（Demilitarized zone, 非武装中立地帯）外側（南側）の「民間人統制区域」内にある頭陀淵（Dutayeon）溪谷を訪問した。民間人統制区域に入るには事前に楊口郡庁への申請が必要で、この手続きは江原大学校にお願いした。頭陀淵入口のCCL（Civilian Control Line, 民間人統制線）には軍の駐屯地がある。ここで武装した軍人による検問を受け、名前と所属の確認後に番号入りのGPS記録装置を受け取って民間人統制区域内に進んだ。頭陀淵は2003年まで民間人が立ち入りできなかった場所で、北朝鮮側から流れてくる川がつくる溪谷に手つかずの自然がそのまま保存され、天然記念物のヤギやムササビなどの生息地として知られている。日本人ガイドと一緒に整備されたトレッキングコースを歩いたが、歩道わ

きには「地雷注意」の有刺鉄線が延々と続いていて（図4）、小道を一行に進むのみであった。2013年には、江原大・山科学大学（学部）の Park, Wan Geun 先生の同行を得て、頭陀淵の自然環境に関するより詳しい観察ができた。

午後、朝鮮戦争（韓国戦争）の激戦地であった楊口パンチボウル地区に移動した。楊口戦争記念館で立ち入り許可を取ったあと、午前と同様に武装した軍人の検問を受けて民間人統制区域内に進んだ。急坂を登りきった尾根上に立ち、北朝鮮領内の金剛山を眺めることのできる乙支（Eulji）展望台を訪問した。乙支展望台はDMZ（非武装中立地帯）の南側鉄条網ぎりぎりに立つが、この地域はもともと2kmあったはずのDMZの幅が狭くなっており、MDL（Military Demarcation Line、軍事分界線）までの距離が500m未満しかない。展望台からは北朝鮮領内がよく見え、500ウォンの双眼鏡で北朝鮮側の歩哨所などを観察できた。その後、近くの第四地下トンネルを見学した。第四トンネルは北朝鮮によるいわゆる南侵トンネルのひとつで、1990年に韓国で4番目に発見され、整備、公開されている。撮影禁止を言いわたされてトンネル内を見学し、トロッコでMDL（軍事分界線）の100m手前まで進んだ。学生・教員双方が、戦争中の国であるということを再度、認識するとともに、終始緊張感の漂うツアーであった。

#### 4. 企業訪問

プログラムの受け入れをお願いしている江原大・経営大学（学部）の Yi, Yu 先生のご紹介で、2012年プログラムでは、原州のIT企業DUZON（1991年設立）を訪問した。DUZONは韓国初のクラウドデータセンターを設立してサービスを提供し、日本法人もある。韓国企業の業務効率化のためのITソリューションの開発や普及の過程についての説明を受けた。組立ラインを見学することの多い生産現場と異なり、DUZONでは大きなホストコンピューターがすべてを統御し、社内もとてもまとまっている印象であった。企業見学がはじめての学生もあり、とまどいも感じられた。学生には若干分かりづらかった面もあったようだが、DUZONから社員食堂での昼食の歓待を受けるなど、韓国の企業文化をみることができた。

2013年は慶州訪問にあわせて、蔚山の金属加工企業Rinno Aluminium Co.（1988年設立）を見学した（図5）。世襲で“中規模の企業”であり、地元金融機関からの融資を受け自動車用などのアルミニウム圧出製品を生産しており、日本企業への輸出も行っているとのことであった。企業概要の説明を受け、工場内を見学させてもらった。工場では外国人労働者が働いている姿も見られ、韓国でも労働市場の国際化がすすみつつあることが垣間見えた。学生は整理・整頓・清潔・清掃・躰とい



図5 Rinno Aluminium Co.見学



図6 江原大演習林トレッキング

ういわず 5S スローガンに関心を示していた。日本の大学からの見学希望ということで、先方には快く受けていただき、丁寧な説明がなされたが、馴染みのない生産現場における溶接・成形のような専門用語や機械・部品についての説明は、学生には少し難しかったようである。

## 5. 江原大演習林

江原大学演習林は、韓国ではソウル大と並んで規模の大きな大学演習林である。春川市から車で 30 分ほどの江原道洪川 (Hongcheon) 郡にあり、宿泊施設も揃っている。2012 年度は訪問時間が遅くなり、滞在時間が短くなってしまったこと、小雨が降る悪天候であったこと、先に国立樹木園を見学していたことから、概要の説明と園内を短時間散歩し演習林の雰囲気を感じた程度で終了した。

2013 年度プログラムで再訪した際には、演習林施設に自炊で 1 泊した (2010 年度プログラムで宿泊したのは別の施設)。次の日の午前、江原大学校山林科学大学のポスドクと院生のガイド、その他韓国人学生と一緒に園内の半日トレッキングをおこなった。演習林を使って研究を行っている院生に解説をいただいた (図 6)。訪問した 3 月はまだ氷点下になる早春でほとんど花もなく、植物観察としては時期がよくなかったが、それでも解説により日本の植物との共通性を確認することができた。ゆるやかな集団行動の中で日韓の学生が入り交じって交流し、学生生活全般に関する会話を充実させることもできた。

## 6. 道庁訪問 (2012 年)

2012 年度のプログラムでは、春川市中心部にある江原道庁を訪問した (図 7)。江原道の全般的な説明を受け、庁舎内を見学させてもらったあと、林業部と観光部においてヒアリングを行った。林業部では江原道の森林資源の現状と林業政策についてのお話をうかがった。韓国でも人工林が多く、チョウセンゴヨウ *Pinus koraiensis* が日本のスギ *Cryptomeria japonica* のような存在であることがよくわかった。林業の衰退が共通する課題であることも確認できた。

観光部においては、道庁の政策 (江原プラン) や、DMZ 観光の現状、平昌オリンピック、鳥取県にも関連のある DBS フェリーの利用状況と助成、今後の方向性などについてのお話をうかがった。学生からは、主に江原道の特産品についての質問が出たが、はじめて訪れる海外の地で、その地域に関連した事項について、自治体という日常、馴染みのない機関の政策担当者を相手に積極的に質問をするということは、語学の課題も含め非常に難しかったようである。



図 7 江原道庁訪問



図 8 プレゼンテーションのようす

## 7. プレゼンテーション

現地報告会プレゼンテーションは、2012、2013 年度ともに一人 5 分をめどに、原則として英語での発表を義務づけた。プログラムの中で個人個人が興味を持った内容を掘り下げて発表することとし、滞在中に学生とミーティングを行いながら個別に内容をかためていった。準備段階では内容が互いに重ならないように調整するとともに、表面をなぞっただけにならないよう、随時さまざまなアドバイスをおこなった。江原大学のサポート学生にも、学生の認識間違いなどを指摘してもらった。2012 年度の発表会では 4 名の学生が英語で発表を行い、鳥大でハングルを履修していた 2 名は、韓国語でのプレゼンテーションに挑戦した。2013 年度は、参加した 5 名全員が英語で発表を行った。

発表会には、鳥取大学や日本の他大学に留学経験のある江原大の学生や、本プログラムに協力してもらった学生、交流に関心のある学生など多くの参加があった。各発表に対して質疑の時間を設けた（図 8）。両年の発表タイトルについて表 3 に示した。発表内容は、全体にはプログラム内容の影響を受けており、2012 年度には森林や観光に関するもの、2013 年度には歴史民俗や交流に関する発表が多くなった。参加学生のプレゼンテーションからは、地域調査実習の発表会を経験している 3 年生と未経験の 2 年生の訓練度の違い、語学力、表現力などの問題を感じたが、学生ならではの視点を感じるものもあった。質疑については、江原大学の学生から建設的な指摘を多数もらった。応答は日本語でも可としたが、的確な受け答えはなかなか難しい印象であった。

発表会後には、日韓学生討論会を企画した。自由時間の交流ではなかなか議論できない日韓の問題について、あえて討論を試みた。基本的には通訳を通して、学生気質や就職状況の話題から始め、日韓関係に至る議論にまで進んだ。本音が出ていない部分もあったろうが、学生たちがメディアを介さない韓国人学生の生の意見を聞く貴重な機会となった。

表 3 2012、2013 年度の現地発表会プレゼンテーションの概要

	プレゼンタイトル	内容
2012年	Impressions about common plants in South Korea	日本と韓国の樹木比較（類似性を指摘）
	Forest management in Japan and Korea	日本と韓国の森林管理について類似点と相違点を考察
	The comparison between Korea and Japan	食品容器、日常道具の相違点から日韓の違いを考察
	My first Korean visit	看板やパッケージなど「赤」を多用する韓国の文化を考察
	I met Samul nori -the Korean lofklore culture-	鳥取の伝統芸能や祭りを紹介しつつ、サムルノリの良さを考察
	About tourism between Tottori and Kangwon	江原道庁取材などをもとに、日本からの観光客誘致を議論
2013年	My discovery in Korea	韓国の自然景観、交通など日本との違いを議論
	Korean food	初めてあった韓国料理への驚きを学生ならではの視点で紹介
	What's the difference	上下関係に厳しく、はっきりものを言う韓国文化を考察
	The difference in architecture between Korea and Japan	韓国に石像が多く木像が少ないことの紹介とその背景考察
	The difference of tree vegetation between Korea and Japan	気候の違いなどをもとに日本と韓国の人工林の違いを考察



図9 ソウル戦争記念館見学



図10 慶州大陵苑（天馬塚）の見学

## 8. ソウル研修

報告会が終わった後ではあったが、海外フィールド演習を通して学んだ韓国について、より重層的にとらえるための仕上げとして、2012年度、2013年度ともにソウル見学を組み込んだ。2012年度のソウル研修は一日のみで、景福宮や国立民俗博物館を見学する程度の余裕しかなかった。2013年度はソウル滞在を一日延ばし、初日に国立中央博物館、戦争記念館（図9）、国立民俗博物館を訪れた。二日目は自由行動とし、夕方集合して江原大ソウルオフィスを表敬訪問した。プレゼンテーションを終えた後でもあり、学生たちの晴れ晴れとした笑顔が印象的であった。

## 9. 歴史・民俗研修（2013年）

2013年度プログラムでは、韓国の歴史と民俗について知識を深める研修として、1-3日目に慶州や安東を訪れるツアーを組み込んだ。初日に宿泊した忠清北道忠州市水安堡（Suanbo）は温泉保養地として有名な場所で、ホテルでは韓国式の温泉を楽しんだ。水安堡は、月岳山（Woraksan）国立公園に隣接し、2日目午前月に岳山を訪れたが、短時間で見学するのに適当な場所がなく、今回は短い散歩により景観を確認するにとどめた。その後、慶州歴史遺産地区（世界文化遺産）に移動し、石窟庵（ソックラム、Seokguram）と大陵苑（Daereungwon）を見学した。慶州歴史博物館はおしくも休館日であったため、野外展示だけを見学した。ソックラムは日本統治時代の補修について議論のある仏教遺跡で、そのような背景も説明しながら見学した。大陵苑では新羅王朝の大規模な古墳群を見学し、天馬塚（Cheonmachong）では日本語のボランティアガイドの方に詳しい説明をいただいて（図10）、理解が格段に深まった。

慶尚北道安東市の河回村（Hahoe Ma-eul）は、農村における両班の伝統的な生活様式が維持されている民俗村で、ユネスコの世界文化遺産に指定されている。茅葺きの伝統的な家々が数多く保存されている印象的な場所である。ここでは日本語ガイドさんによる説明を受けながら2時間のコースを歩き、韓国の伝統的な民俗、生活様式などについて理解を深めることができた。

## V. 学生と引率教員のプログラム総括

### 1. 学生のレポート

2012年度プログラム6名、2013年度プログラム5名について、帰国後に提出されたレポートを、筆者らが要点整理した。参加した学生は、2012年度、2013年度のプログラムとも、全員が初めての韓国訪問であった。鳥大への留学生との交流や韓流ブームなどを通じて韓国に興味をもったものの、自力で韓国を訪問して交流することにはハードルがあり、本プログラムをチャンスと感じて参加し

てくれた学生が多かった。レポート全体に、プログラムを通じての驚きや発見、関係者への感謝が表現されていた。印象に残った点としては、韓国の文化（特に食べ物）、人々、自然や風土に関して日本との違いを比較するものが多かった。DMZ 訪問を通じて、韓国の置かれている厳しい現実に気づいたとの感想もあった。

本プログラムでは、2012 年度は 2 名、2013 年度は参加した 5 名全員が、初めての海外渡航であった。海外経験という点からは、「見るもの全てが学びの対象」であったと表現したレポートがあった。韓国料理の味付け、食器やパッケージ表記の違いなど、わかりやすい違いはもちろん、韓国社会に儒教の精神が色濃く残っており、年長者への接し方が日本と比べ丁寧で、日頃の生活の中からお酒のマナーに至るまで、目上の人を尊敬する精神が流れていること、などへの気づきもあった。日常生活のさまざまな場面に韓国と日本との細かな違いを発見し、なにげない日常生活の中にその国独自の文化が宿っていることに気づいたとの感想があった。江原大学のキャンパスと快活な学生が醸し出す雰囲気に触れ、大学キャンパスにみられる国の違いを感じた学生もあった。隣国である韓国にさえ文化の違いを感じることに驚き、「もっと他の国も見たい」との感想は、本プログラムの意義づけに力を与えてくれた。

2012 年度のプログラムでは主に二人の韓国人学生に滞在中ずっとお世話になり、彼らの献身的協力に深い感謝が示された。彼らを通して韓国社会に残る上下関係の厳しさを実感し、尊敬の念を表したものがあった。同時に、2012 年度のレポートでは「もっと現地の学生と交流できる機会を増やしてほしい」との意見が複数あげられていた。そのような反省から、2013 年度のプログラムでは、9 泊のうち 4 泊を思い切って学生宅へのホームステイとした。2013 年度に参加した女子学生 2 名は、当初は日本語が話せる学生宅に、後半は日本語が話せない学生宅にステイしたため、意思疎通の大変さを実感したと報告した。お互いのことをもっと知りたい、理解したいという思いから、紙やジェスチャーを駆使しての意思疎通となり、言葉は通じずとも相手のことを知ろうという思いがあればコミュニケーションが可能なことを実感する機会になったようである。

学生たちは、韓国と北朝鮮の関係について、徴兵制の話や DMZ 訪問を通して初めて具体的にイメージができたようであった。鉄条網や地雷注意のプレート、多くの武装兵士を見て衝撃を受けた、という感想も複数あった。これをきっかけに日韓の問題を自ら深く考えるようになればと願う。

プログラムの成果発表会プレゼンテーションは、今後につながるよい経験であったと全員が答えた。「地域をみつめる」という点からは、参加者間のディスカッションを通じて視点の多様性を学んだようである。語学力不足をなげき、今後の努力を誓う声は全員に共通していた。

学生たちはプログラムを通して、韓国は日本にとって距離的に一番近い国であるにも関わらず、日本人は韓国について知らなさすぎることに気付いたようである。韓国語がわからない日本人に対して、韓国で出会ったすべての人々が親切に接してくれて韓国と韓国人に興味がわいた、また韓国を訪れたいとの思いも全員がさまざまに表していた。

## 2. 教員の観察

成果報告会について 2012 年度は、参加者の中に韓国語が堪能だった学生や以前にも韓国を訪れたことのある学生がいたため、他の学生をリードする形でうまくまとまったように感じられた。英語・韓国語でのプレゼンテーションは、全体的にはうまくこなすことができた。最終日のソウル研修では、韓国に対して強い関心を持ち、鳥取大学に留学していた友人を訪ねたりなど事前に詳細に計画を立てていた学生が印象的であった。

2012年度はプログラムの開催時期がちょうど現地のハイシーズンと重なったため、大学の施設はいっぱいで、なかなか滞在先が決まらなかった。街から離れたコテージでの自炊や、韓国の伝統的な家屋に宿泊することになり、学生たちは多少の不便さを感じたかもしれないが、それも良い経験となったのではないだろうか。滞在中は、一日の中で短い時間ごとにスケジュールを区切って見学を詰め込んだので、やや駆け足的に概要を垣間見たのみとなった所があった。調査対象地に関する資料収集などを出発前に日本で行っておけば、発表のテーマ設定もスムーズになり、滞在中に慌てなくてすむかもしれない。

2013年度は、参加した学生が同じ学科の学生たちで、また馴染みのある教員による引率ということもあり、はじめからうちとけまとまりがあったように思われる。2012年度のプログラム同様に、見学先では時間に制約があったり、スケジュールが急に変更となったりと、臨機応変さが求められた。初めての海外渡航のため、体調がすぐれない学生も出たが、大事には至らず全員が韓国を楽しめたのはなによりであった。

2013年度の発表会は、それぞれ個性的なテーマでのプレゼンテーションとなり、準備段階から通訳の形でかわってくれた韓国人学生の存在なしでは成り立たなかった。発表会に参加した韓国人学生・教員からは、「日本ではどうか、日本人の視点ではどのように考えるか」という質問、あるいは発表者独自の見解を問う質問がなされ、学生にとっては日本社会や文化、自分自身を考え直す貴重な機会となった。

2013年度の春川での学生宿泊は、韓国人学生による全面的な協力のおかげで、すべてホームステイとして実施できた。不便さや窮屈さも感じたであろうが、学生たちはホームステイを通じて、経済面を超越したところで海外からの訪問者を迎え入れる韓国人学生のすがたに触れ、それぞれ考える所があったようである。また韓国人学生からは、先輩や年上の方々にどのように接するべきか、という点についても学んだようである。出発前と帰国後とで、韓国に対する学生たちの見方に変化があったことが見て取れた。

## VI. プログラムの成果と課題、今後の展開

### 1. 直接的な成果

繰り返しとなるが、2012年は6名の参加者中2名、2013年は5名の参加者全員が初の海外旅行であり、パスポートの取得方法から助言を行った。8-10日間の短いプログラムではあるが、海外経験の点からは、ゼロからイチへの転換という大きな意義をもつものであったと考えられる。初めて実際の韓国に触れ、メディアを通してしか知らなかった韓国の社会や文化、自然を実際に自分の目で見た経験の重要性は前項までに記したとおりである。昨今の日韓関係の冷え込みも手伝って形成されている、近くて遠い国、よくわからない国、という学生たちの消極的なイメージを、国際理解の点から望ましい、偏見を廃した方向にいくらかでも変えられたのではないかと思う。さらに、分断国家の象徴的な存在であるDMZの訪問で感じた独特の緊張感は、全参加者があげる意義深い国際経験である。加えて、英語（韓国語）によるプレゼンテーションの経験（自信）も成果にあげられる。海外経験と国際理解の両面で、本プログラムを通して経験した様々のことが彼らのこれからの活動に必ず役立つはずである。2012年度に参加した学生のうち、その後2名が留学にすすんだ。このプログラムが影響した面もあると考えたい。

### 2. 間接的な成果

参加学生たちは、プログラムへの参加を通じて、日常触れ合う機会の少ない他学科の学生や韓国人学生と時間を共有した。同じ体験をして、さまざまな事象について掘り下げて話し合う機会を持つこと自体、昨今の学生には重要な経験であろう。他人とふれあい、行動をともにして、一緒に何かを行ったり、楽しんだりということの大切さに気づいたはずである。プログラムは、韓国の学生と日本の学生の学問に対する姿勢の違いに気づき、学生が自身の学問への取り組み方について顧みる機会ともなった。

海外において、日本の文化や歴史、自然環境について自身の言葉で説明できるように、自国についてもっと学ぶ必要がある、との気づきもあった。また、日本文化の穏やかな雰囲気、人々の表現の仕方、整備の行き届いた街や、豊かな自然を改めて再認識したとの意見もあった。なにより、「また海外にいつてみたい」という気持ちにめざめた学生がみられたことが間接的な成果だろう。

### 3. プログラムの継続に向けた課題

海外フィールド演習は、学部学生が比較的早い段階で海外を経験・見聞し、自身で国際化について考える良い機会である。江原プログラムは、短期間でさまざまな調査・見学・体験を行えるプログラム構成を目指している。これまでの参加学生の状況から、関心事や専門性などが異なっても参加可能なプログラムにはなっている。一方で、プログラムは総花的で専門性の掘り下げには課題があり、専門的な交流を深める方策について考えていく必要がある。まずは、成果発表会を単なる外国語プレゼンテーションの体験にしないよう、学生に出発前からしっかりと認識させる必要がある。

プログラムの実施体制については改善が必要である。江原プログラムの開催準備と実施には、2012年度、2013年度を通じて個人的な労力負担が大きかった。実施にあたっても2013年度にみられたように、他プログラム、特に南ソウルプログラムとの調整が必須である。海外フィールド演習全体の継続に向けて、個人の労力を軽減し組織的に対応可能な体制づくりが望まれる。国際交流では、どうしても互いの個人的な関係でその盛衰が決まる面があるが、安定したプログラムを学生に提供するには、多くの教員が参加できる体制を作り上げていく必要がある。

受け入れ先との関係についても改善が必要である。現状は個人による受入れであり、多大な労力負担をお願いしている状態である。このままでは継続可能性が低い。少しずつでも相互にメリットのある交流内容に改善していき、現在は鳥取大学側が全面的に負担している滞在経費についても、慣習の違いを認識した上で相互の希望を盛り込み、同じような経済的負担のもとに、ともに啓発できる姿が望ましいと考える。地域学部の多様な専門性の点からは、受入れ先の学部や領域、教員をできるだけ広げることがプログラム継続のために必要であろう。交流協定校どうしの調査交流として、先方にも主体的な計画や単位認定をお願いし、調査領域を広げることで関係教員を増やしたい。海外フィールド演習を学生向けの単なる教育プログラムに終わらせることなく、研究者交流につながる機会として生かすことまで視野に入りたい。

経済的な負担について、2013年度にはJASSO奨学金が活用でき、学生負担は軽減された。しかし、JASSOの資格を満たし受給できた者と、できず非受給となった者が生じ、教育振興尚徳会からの助成があったものの、その公平性について検討しておく必要があるかもしれない。プログラムの継続性を考えると、教員旅費やJASSO奨学金などを含めた予算措置の安定性についても考えていく必要がある。

筆者らにとってもここまでの江原プログラムは、学生をともなって海外で調査交流を実施するという点、専門性の異なる教員が連携して国際交流を続けていく点、今後の両大学間の国際交流の輪

郭について改めて考える点など、大きなチャレンジを含んだものであった。このプログラムが地域学部学生の海外経験や国際理解向上に多少とも刺激を与えていることを信じたい。教育効果や改善点についてもさらに詳細に検討していくことが必要である。さまざまな課題を乗り越えて、今後の「海外フィールド演習」と韓国・江原プログラムが良い方向に発展することを期待したい。

## 謝辞

韓国・江原大学校における「海外フィールド演習」は、学生の韓国渡航にあたって、日本学生支援機構 (JASSO)、教育振興尚徳会・地域学部助成会からの経済的ご支援をいただいた。江原大学校経営大学の李悠教授には、実習全体のコーディネート、スケジュール管理、実習中のガイド等、実施にあたって物心両面にわたり多大なご協力をいただいた。同山林科学大学 Park WanGeun 教授、学術林の方々には実習に必要なさまざまな便宜をはかっていただいた。同人文科学大学 長原成功先生には、プレゼンテーションと討論会でたいへんお世話になった。江原大学校国際交流センターの方々には実習に際してご支援をいただいた。江原大学校の多くの学生さんには、学生サポートや通訳、ホームステイなど多くお世話になった。鳥取大学の関係組織にもサポートをいただいた。実施にあたってご協力頂いた全ての方々にお礼申し上げる。

## 引用文献

- Gangwon Province (2014) 江原道公式サイト (日本語版)。 <http://jpn.gwd.go.kr/> (2014.5.30)
- 岡田昭人 (2012) 「新しい国際教育プログラムの展望と課題ー東京外国語大学ショート・ビジットプログラム (SV)を事例として」 広島大学国際センター紀要 2:69-83.
- 仲野 誠・小泉元宏・アクバル ナドジャル ヘンドラ・ハリ ナレディ・デスビアン バンダルシャ (2013) 「海外フィールド演習」における他者との出会いの効用-インドネシアプログラムを事例として- 地域学論集 10:1-44.
- 永松 大・田川公太朗・筒井一伸・中村英樹・関 耕二・グエン クアン トゥアン (2010) ベトナム・フエ科学大学との学術交流展開に向けて. 地域学論集 7:141-155.
- 佐藤 由利子 (2014) 海外短期派遣を通じた日本人学生のグローバル化効果と実施上の課題-国際環境事例研究に参加した大学院生及び指導教員の調査結果から- 広島大学国際センター紀要 4:57-73.
- 田川 公太朗・永松 大 (2010) 韓国江原大学校における「海外フィールド演習」のこころみ. 地域学論集 7:323-336.
- 筒井一伸・仲野 誠・永松 大・グエン クアン トゥアン・ブイ ティ トゥ・レ ディン トゥアン (2012) ベトナムにおける「海外フィールド演習」の成果と課題：フエ市でのパイロットプログラムの実施を通して. 地域学論集 9:1-21.
- 筒井一伸・片垣亜弥子・仲野誠・小玉芳敬・ブイ ティ トゥ・レ ディン トゥアン・チュオン ディン チョン (2013) 効果的な「海外フィールド演習」の実施に向けた課題-ベトナム・トゥアティエンフエ省でのパイロットプログラムを通して-. 地域学論集 10:63-83.

(2014 年 6 月 6 日受付, 2014 年 6 月 26 日受理)